「おもしろい」と「おかしい」の意味分析

A Semantic Analysis of *Omoshiroi* and *Okashii*

加藤　恵梨

要旨

喜びの感情を表す「おもしろい」と「おかしい」を取り上げ、それぞれの語の意味および両語の意味の相違点を記述した。具体的には、まず「おもしろい」に三つの多義的別義を認め、別義１を〈新しい発見に〉〈気持ちが引きつけられる〉〈さま〉、別義２を〈展開が予測できない事柄に〉〈夢中になる〉〈さま〉、別義３を〈思い通りの結果が得られ〉〈気持ちが満たされる〉〈さま〉と記述した。次に「おかしい」に二つの多義的別義を認め、別義１を〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈笑いがこみあげてくる〉〈さま〉、別義２を〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈正常ではないと感じる〉〈さま〉と記述した。また、これらの記述と先行研究の検討を基に、「おもしろい」はある物事に対する知的な興味を表すプラス評価の語であるのに対し、「おかしい」は興味深いという意味を表さないという点に違いがあることを述べた。

キーワード

「おもしろい」　「おかしい」　意味分析　比喩　フレーム

1. はじめに

本稿の目的は、喜びの感情を表す「おもしろい」と「おかしい」を取り上げ、それぞれの語の意味および両語の意味の相違点を明らかにすることである。

本稿の構成について簡単に述べると、次の２節で分析の理論的背景となる「メタファー」及び「メトニミー」という比喩と、「フレーム」について概観する。３節では「おもしろい」についての先行研究の記述を検討し、「おもしろい」の意味を分析する。続いて４節では「おかしい」についての先行研究の記述を検討し、「おかしい」の意味を分析する。３節と４節の分析結果を基に、５節では「おもしろい」と「おかしい」の類似点・相違点について考察する。最後に６節で本稿の分析のまとめを述べる。

2. 比喩（メタファー、メトニミー）とフレーム（frame）

３節と４節で、「おもしろい」と「おかしい」が有する複数の意味の関連性を「メタファー（隠喩）」及び「メトニミー（換喩）」という比喩と、「フレーム（frame）」によって説明する。本節では分析の理論的背景となる「メタファー（隠喩）」及び「メトニミー（換喩）」と、「フレーム（frame）」について先行研究の記述を概観する。

2.1. メタファー（隠喩）とメトニミー（換喩）

籾山（2010: 35）はメタファー（隠喩）を次のように定義している。

> ２つの事物・概念の何らかの「類似性（similarity）」に基づいて、本来は一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩

メタファーの具体例として、形などの外見の類似性に基づくものと、より抽象的な類似性に基づくものがある。形などの外見の類似性に基づき生じたメタファーには、「猫背」「鳩胸」「目玉焼き」などがある。一方、より抽象的な類似性に基づくメタファーには、「肩の故障で、今シーズンを棒に振ってしまった」という表現がある。本来〈機械などが正常に機能しなくなること〉を表す「故障」が「人間」に関して使われる場合、「故障」は〈スポーツ選手などの体（の一部）が正常に機能しなくなること〉を意味する。この新しい意味は、〈正常な機能が果たせなくなること〉という本来の意味との共通点に基づくメタファーである（籾山 2010: 36）。

次に「メトニミー（換喩）」について見ると、籾山（2010: 44）はメトニミー（換喩）を次のように定義している。

> ２つの事物の外界における「隣接性（contiguity）」、さらに広く２つの事物・概念の思考内、概念上の「関連性」に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩

続いて、メトニミーの具体例を籾山（2010: 45-48）にそって概観する。

(1) テーブルを片づける。
(2) 扇風機が回っている。
(3) （お）手洗い　　((1)-(3) 籾山 2010: 45)
(4) A さんは目に見えて上達した。
(5) やっとレポートが終わった。
(6) 漱石を読む。　　((4)-(6) 籾山 2010: 47)

メトニミーの最も基本的な基盤は、二つの事物が空間的に隣接している際に、本来は一方の物を表す表現で、もう一方の物を表すというケースである。例(1)が〈テーブルの上にあるもの（たとえば食器類）を他の場所（たとえば流し）に移す〉あるいは〈テーブルの上に散らかっているものを整理する〉といった意味で用いられる場合、「テーブル」という語がメトニミーによって〈テーブルの上にあるもの〉を表している。

空間的な隣接の特殊なケースとして、部分と全体の関係に基づくメトニミーがある。例(2)における「扇風機」は、本来〈(機械）全体〉を表す「扇風機」という語が〈羽根〉という部分を表しているため、「全体→部分」という方向のメトニミーである。

また、メトニミーには、二つの出来事が時間的に隣接することに基づく場合もある。例(3)が〈用便（するところ)〉という意味で使われるのは、〈用便〉と〈手を洗うこと〉が時間的に連続していることに基づいている。

さらに、メトニミーには二つの出来事が原因と結果の関係、モノとそのモノに関して行う典型的なコト（行為）の関係、作者と作品の関係に基づく場合もある。

まず、二つの出来事が原因と結果の関係にあることに基づくメトニミーについて見ると、例(4)の「目に見えて」は、本来は〈視覚で捉えられる〉ことを表すが、ここでは〈はっきりとわかるほど〉という意味を表す。「目に見えて」がこのような意味を表せるのは、視覚で捉えられたのであれば、はっきりとわかると考えられるからである。つまり、〈視覚で捉えられる〉ことが原因、〈はっきりとわかる〉ことが結果という関係にあり、「目に見えて」は、本来は原因を表すが、メトニミーによって結果を表すことができる。

続いて、モノとコトの関係に基づくメトニミーについて見ると、例(5)の「レポート」は〈レポートを書くこと〉という意味に理解できるように、本来はモノを表す表現が、そのモノに関して行う典型的なコト（行為）を表すというものである。

作者と作品の関係に基づくメトニミーとは、例(6)のように、本来は作者を表す表現（「漱石」）で作品を表すというものである。

2.2. フレーム（frame）

Fillmore（1982: 111）は frame を次のように定義している。

> By the term ‘frame’ I have in mind any system of concepts related in such a way that to understand any one of them you have to understand the whole structure in which it fits ; ...

Fillmore が述べているように、フレーム（frame）とは、ある一つの概念を理解するために、

それが適合する全体的構造を理解しなければならないというような形で関係づけられた、概念体系であると言うことができる。

例えば、land と ground という二つの語はともに、〈地球の乾いた表面（the dry surface of the earth)〉を指して使われるが、land は海(sea)と対比した時の地球の乾いた表面を指し、ground は大気(air)と対比した時の地球の乾いた表面を指す。よって、この二語は、フレームの中でどのように位置づけられるかという点において異なる。a bird that spends its life on the land と言えば〈水鳥ではない鳥〉のことであり、a bird that spends its life on the ground と言えば〈飛べない鳥〉のことであると理解することができる。このように、同一の事態に対して異なるフレームが用いられることにより、異なる語が使われている(Fillmore 1982: 121)。

また、籾山（2010: 86）は「トイレ」のフレームを次のように記述している。

トイレに入る→排泄する→手を洗う→トイレから出る

「トイレ」のフレームは、「トイレ」に関する私たちの経験を通して形作られたものであり、いくつかの異なる行為から構成され、各行為が決まった順序で行われることが示されている。このようなフレームの知識を共有しているため、「朝起きると、まずトイレに行く」とだけ言えば、「トイレ」のフレームに含まれる全過程を伝えることができる（籾山 2010: 86-87)。

さらに籾山（2010: 92）は、メトニミーはフレームの観点から説明することもできると指摘している。例えば、例(3)で見た「(お) 手洗い」という表現を「トイレ」のフレーム（「トイレに入る→排泄する→手を洗う→トイレから出る」）に基づいて考えると、「(お) 手洗い」で〈用便〉を表すというのは、「トイレ」のフレームにおいて、「手を洗う」ことから「排泄する」ことに焦点がずれる（シフトする）ことと考えられる。

西村（2008: 81）も、メトニミー表現の多くの生成と理解にはフレーム的知識が貢献していると述べ[1]、次のように説明している。

(7) a. I <u>locked</u> the door.
　　b. I <u>locked</u> the room.
(8) a. He was <u>locked</u> in the cell for a week.
　　b. She got angry and <u>locked</u> me out.
　　c. Everything of value must be <u>locked</u> away.　　((7)-(8) 西村 2008: 83)

例(7a)と(7b)の lock は、いずれも施錠という行為に関する一般的な知識（一種のフレーム）全体を喚起する点は共通しているが、そのフレームの中のどの面（施錠行為全体のどの段階）に焦点を合わせるかという点において異なっている。具体的には、〈(部屋などの) 空間への（ドアなどの）出入口を閉鎖の状態に固定することによって、空間内へのアクセス、空間からの脱出等を阻止する〉というフレームのうち、例(7a)の焦点がドアを閉鎖状態に固定する段階にあるのに対して、例(7b)はその結果部屋が侵入または脱出不可能になる段階を焦点化している。

例(7b)では、施錠フレームの中の（侵入、脱出等が不可能になるという）空間の状態変化に焦点が合わせられているのに対し、例(8)では、空間をそのような状態にすることによって達成される（人を空間内に閉じ込める、人を空間から閉め出す、貴重品を保管するという）目的に

焦点が移っている。例(8)では、施錠フレームの焦点化される局面が例(7a)や(7b)と異なるものの、文の表す意味が十全に成立するにはフレーム全体の活性化が不可欠である。

以上の lock の用法はいずれも、[Ⅰ〈空間への出入り口を閉鎖状態に固定する〉(e. g. (7a))・・・・・・>[2]Ⅱ〈空間を外からのアクセスまたは中からの脱出が不可能な状態にする〉(e. g. (7b))・・・・・・>Ⅲ〈人やものを空間に閉じ込める、または空間から閉め出す〉(e. g. (8a-c))]のⅠ-Ⅱ間およびⅡ-Ⅲ間に手段と目的という関係が成立する施錠フレームに基づいている（西村 2008: 83-84）[3]。

3. 「おもしろい」について

以下では、「おもしろい」についての先行研究の記述を検討し、「おもしろい」の意味を分析する。

3.1. 先行研究の記述とその検討

森田（1977: 141）は「おもしろい」の意味を次のように記述している。

おもしろい〔面白い〕
ある事物の内容に接して興味がわき、楽しい気分になる状態。

上の意味記述に加え、「『おもしろい』は、『君の意見はなかなか面白い』『面白い小説』『今日の試合はとても面白かった』に見られるように、その内容の全貌に接して、こちらが飽きることのない興味を覚える状態であり、部分の総合としての全体を眺め、その組立てにおける興味の深さを考える。『あまり面白くてやめられない』『途中から見たので、ちっとも面白くない』など、『おもしろい』は部分の積み重ねとして構成されていく感覚である。同様に、『面白い顔』『面白いデザート』なども単一の事物を対象としているようだが、『面白い顔』は目鼻立ちといった組み合わせにおける配置・釣合を考えているし、『面白いデザート』はそれまでの料理とデザートとの取り合わせの妙を捉え、いずれも部分と全体との関係を発想の基本にすえている」（森田 1977: 141-142）と記述している。

続いて、飛田・浅田（1991: 128-129）は「おもしろい」の意味を次のように記述している[4]。

おもしろい〔面白い〕
① 興味がわいて心が引かれる様子を表す。
「彼の意見はユニークでおもしろい」「そのコメディアンのしぐさはおもしろい」
② 好ましく望ましい様子を表す。
「一生懸命やったが、結果はおもしろくなかった」「そのTシャツはおもしろいように売れる」

森田と飛田・浅田の意味記述から、「おもしろい」は興味がわくことによって生じる感情であると考えられる。しかし、森田の意味記述を見ると、「たのしい」を介して「おもしろい」の意味を説明しており、「たのしい」を介して説明したのでは「おもしろい」の意味が明らかにされているとは言いがたい。

また、森田は、「おもしろい」は「部分の総合としての全体を眺め、その組立てにおける興味の深さを考える」と記している。しかし、次の例(9)のように、部分と全体との関係から「おもしろい」と感じているとは考えられないものも見られる[5]。

(9) 秋のある日、庭の隅の地上で変な物体を見つけた。大きさは五ミリほどで、あちこちにバラバラと散らばっている。見つけたときにはこのあたりに茂っている植物の落下した種だろうと思い、いずれにしてもおもしろい形をしているので、カメラでねらってみることにした。
　ファインダーをのぞきながら、こんな植物の種はこれまで見たことがない、と思いながら撮影しているうちに、突然はっと思いついて、その物体の正体が判明した。
（中日新聞　2007年3月13日）

例(9)は、二重下線をひいたところから分かるように、「これまで見たことがない」種の形に対して「おもしろい」と感じている。例(9)は種の組立てなどへの興味深さを「おもしろい」と表現しているとは考えられないため、「おもしろい」という感情は、部分と全体の関係以外の要因によっても生じると考えられる。

以上の先行研究の記述とその検討をふまえ、以下で「おもしろい」の意味を分析する。

3.2.　「おもしろい」の意味分析

本稿は「おもしろい」を多義語と考え、三つの多義的別義を認める。また、分析の最後に別義間の関連性について考察する。

3.2.1.　別義１：〈新しい発見に〉〈気持ちが引きつけられる〉〈さま〉

次の四つの例を見てみよう。

(10) この本は漢字の家族や仲間とそのつながりを、絵を交えてとっても分かりやすく紹介しています。「へえー、漢字っておもしろいな！」という、新しい発見もきっとあるに違いありません。　（土屋秀宇『石井式　なるほど！漢字ワールド』PHP研究所　p. 2）

(11) 秋のある日、庭の隅の地上で変な物体を見つけた。大きさは五ミリほどで、あちこちにバラバラと散らばっている。見つけたときにはこのあたりに茂っている植物の落下した種だろうと思い、いずれにしてもおもしろい形をしているので、カメラでねらってみることにした。
　ファインダーをのぞきながら、こんな植物の種はこれまで見たことがない、と思いながら撮影しているうちに、突然はっと思いついて、その物体の正体が判明した。
（＝(9)）

(12) 「そうなんですか！　これはおもしろい。杜甫が土のなかの家で生まれたとは、知らなかったなあ」　（李杜の国で[*6]）

(13) 二人は中華街をそぞろ歩いた。中国の雑貨屋は見るだけでも面白いものである。つい時間を忘れて見入ってしまいそうになる。　（木山深晴『ゆれる想い』文芸社　p. 51）

例(10)は漢字に関する「新しい発見」、例(11)は「これまで見たことがない」形の種を見ること、例(12)は杜甫について新しい情報を得ることによって「おもしろい」と感じている。これらから、例(10)から(12)は新しい発見によって「おもしろい」と感じていると言うことができる。

さらに例(13)を見ると、「中国の雑貨屋」を「おもしろい」と感じ、「つい時間を忘れて見入ってしまいそうになる」とある。「つい時間を忘れて見入ってしまいそうになる」というのは、新しい発見に気持ちが引きつけられるさまを表していると考えられる。

以上から、「おもしろい」の別義１は〈新しい発見に〉〈気持ちが引きつけられる〉〈さま〉と言うことができる。

3.2.2.　別義２：〈展開が予測できない事柄に〉〈夢中になる〉〈さま〉

次の四つの例を見てみよう。

(14)　〈野球は８対７の試合が一番面白い〉とは、よく言われることだ。はっきりしないが、元米大統領Ｆ・Ｄ・ルーズベルトの言葉だとも伝えられる。

　ある程度、点の取り合いがあった方が面白いのは確かだ。けれど、同じ両軍で十五点入るのでも１３対２ではつまらない。つまり、見て「面白い」勝負のポイントはやはり、一点差の「接戦」にあるということだろう。

（中日新聞　2010年７月14日）

(15)　物語や小説というものは何故面白いのだろう。外山滋比古『思考の整理学』を読んでなるほどと思ったのだが、物語の面白さはその多義性にある、ということなんだと思った。どんな物語、小説でも文字通り書かれているそのお話の背後に、別の何かが隠れている。だから一つの物語を読むことで、私たちは二つの世界、あるいはもっとたくさんの世界に入っていくことが出来るということになるわけだ。

(http://www.honsagashi.net/bones/2010/02/post_1729.html)

(16)　「ゴルフの欠点は、面白すぎることだ」と言った有名なプロゴルファーがいたが、全くそのとおり、面白くて止められないでいる。それは、ゴルフ場の中に、隠れた落とし穴がたくさんあるからであろう。美しいゴルフ場ほど、落とし穴は見事に出来上がっている。　（喜多村洋子『ハミングにのせ』文芸社　p. 231）

(17)　ふと思い立って荷風の『断腸亭日乗』を読み始めた。

　ちょっとつまみ食いするつもりで読み始めたところが、ああ、面白い面白い、すっかり夢中になってしまった。　（林望『日本語の磨き方』PHP研究所　p. 134）

まず例(14)から(16)を見ると、例(14)は「一点差の『接戦』」でどちらのチームが勝つか分からない試合を見ること、例(15)は物語や小説には「文字通り書かれているそのお話の背後に、別の何かが隠れている」こと、例(16)は「隠れた落とし穴がたくさんある」ゴルフ場でプレーすることに「おもしろい」と感じている。例(14)から(16)は、試合の内容、物語や小説の内容、ゴルフ場でのプレーの内容がどのような展開になるのか予測できないため、試合を見たり、物語や小説を読んだり、ゴルフをすることに「おもしろい」と感じている。

また、例(16)ではゴルフが「面白くて止められないでいる」とあり、例(17)ではある小説を

「おもしろい」と感じ、「すっかり夢中になってしまった」とある。例(16)と(17)から、「おもしろい」は展開が予測できない事柄に夢中になるさまを表していると言うことができる。

以上から、「おもしろい」の別義２は〈展開が予測できない事柄に〉〈夢中になる〉〈さま〉と記述できる。

3.2.3.　別義３：〈思い通りの結果が得られ〉〈気持ちが満たされる〉〈さま〉

次の三つの例を見てみよう。

(18)　石飛礫は、おもしろいように命中した。
　木々の枝をつたわったり、木蔭に隠れたりしながら、佐助は、おもうさまに角兵衛を翻弄した。
　これまでの鍛練が、これほどに物をいうとは、おもってもみなかったことで、最初の石飛礫を投げたときの緊張は、たちまち痛快に変わった。　(真田太平記*)

(19) ビジネスはやるほど結果が出るから面白くて、恋とか結婚とかには、あまり目がいかなかったんです。　(大橋清朗『ずっと一緒にいたい人』PHP 研究所　p. 69)

(20) グループ活動はたしかに入る時もやめる時も自由であり、それを引き止める権力もなければ、拘束もない、自由性がある。それ故にそれぞれの責任ある行動や、協力が求められていくものなのだが、自由性だけが一方通行していく傾向にある。
　おもしろくない、楽しくないという表現もさまざまで、一人ひとりちがう。多くは自分の描いていたイメージとかけ離れていた場合や、思い通りにならなかったという不満が、おもしろくないという形で現われてくるようである。
(森川貞夫『地球に生きるスポーツクラブ』国土社　p. 38)

まず例(18)の「おもしろいように命中した」というのは、石飛礫がねらった通りのところへ当たったことを表している。続いて例(19)は、やればやるほど思うような結果が得られることに「おもしろい」と感じている。よって、例(18)と(19)は、思い通りの結果が得られることによって「おもしろい」と感じていると言うことができる。また、思い通りの結果が得られない場合には、例(20)のように「おもしろくない」と表現されている。

さらに、例(20)では、思い通りの結果が得られず「不満」に感じることは「おもしろくない」と表現されていることから、ここでの「おもしろい」は思い通りの結果が得られ、気持ちが満たされるさまを表していると言うことができる。

以上から、「おもしろい」の別義３は〈思い通りの結果が得られ〉〈気持ちが満たされる〉〈さま〉である。

3.2.4.　別義間の関連性について

三つの別義間の関連性について考察する。別義１から３は、ある対象に好奇心を抱くことに関するフレームの中の、異なる段階を焦点化していると考えられる[7]。

まず、別義１（＝〈新しい発見に〉〈気持ちが引きつけられる〉〈さま〉）では、今まで知らなかった新しい発見によって好奇心がかき立てられ、その対象へ気持ちが引きつけられる段階を表している。

次に、別義２（＝〈展開が予測できない事柄に〉〈夢中になる〉〈さま〉）では、その対象がどのように展開していくのかに興味がそそられ、その成行きに夢中になる段階を表している。

さらに、別義３（＝〈思い通りの結果が得られ〉〈気持ちが満たされる〉〈さま〉）では、その展開が自身の予測と同じであり、思い通りの結果が得られたことで満足感を得ている段階を表している。

よって、別義１から３は単一の共通フレームを喚起し、そのフレーム内の互いに異なる段階を焦点化していると考えられるため、メトニミーに基づく関係が成立している。

４.「おかしい」の意味分析

次に「おかしい」についての先行研究の記述を検討し、「おかしい」の意味を分析する。

4.1.　先行研究の記述とその検討

森田（1977：121）は「おかしい」の意味を次のように記述している。

> おかしい
> 普通と異なる状況に接して心の緊張がほぐれ、笑いたくなるような気分である状態をいう。

上の意味記述に加え、次のような説明が加えられている（森田 1977：121-122）。

「おかしい」とは、(1)外面に現れた様子、表情、態度、しぐさ、言葉、口調、格好などが、普通と異なるところから生じる、罪のない笑いを誘う感情で、かなり本能的、生理的現象に近い。「おかしくて、おかしくて、笑いが止まらない」のように、笑わずにはいられない反射的気分が「おかしい」である。

一方、(2)ある事物が一般の様子と異なるために、常に人々を笑わせる状態である場合、そのおかしさは、その事物の持つ特徴の一つとなる。「とてもおかしい笑い話」「ピエロのおかしい仕種」など笑い話やしぐさ自体がおかしさを属性として持っているとみる。

さらに、一般と異なるために笑いを起こさせる事柄や様子は、下落すれば苦笑や嘲笑の的ともなり、(3)一風変わっていること、に通じる。「流行おくれのおかしい服装」「機械の調子がおかしい」「頭がおかしい」のように、普通と異なるが、その理由が分からない、変だ、不可解だ、現状が疑わしい、怪しいなどの強いマイナス方向へと進んでいく。

続いて、飛田・浅田（1991：99）は「おかしい」の意味を次のように記述している[8]。

> おかしい〔可笑しい〕
> ① 笑いたくなるように滑稽な様子を表す。
> 「昨日の喜劇のおかしかったこと」
> ② 人や物事が普通でなく、不審な様子を表す。
> 「昨日からどうも様子がおかしいと思っていました」

飛田・浅田（1991：100）は、①の意味について「おかしい」が指す笑いは本能的・生理的で、意識せずにこみあげてくるような場合が多いと述べ、また、②の意味については、どのように普通でないかによって、さまざまの意味を表すと述べている。

森田と飛田・浅田の記述から、「おかしい」には〈本能的に笑いたくなる〉〈さま〉という意味がある一方で、マイナスの意味があることが分かる。

また、森田は「おかしい」という感情は、「(1)外面に現れた様子、表情、態度、しぐさ、言葉、口調、格好などが、普通と異なるところから生じる」と述べている。しかし次の例(21)のように、外面に現れた様子などから「おかしい」と感じているとは考えられないものも見られる。

(21) どういうはずみか、「発毛の真実と喜びを伝えるために･･･」というCMの謳い文句が「脱毛の真実と喜びを伝えるために･･･」と聞こえてしまった。たぶん疲れていたんだろうが、逆説的に意味がピッタリはまってしまったのがおかしくて、眠い目をこすりながら、けっこう長いこと、ひとりでウケた。

（竹村依孫『真夜中の羊の旅』自費出版　p. 65）

例(21)では「逆説的に意味がピッタリはまってしまった」とあるように、表現上は一見矛盾しているが、その意味を考えるとぴったりと合うことに「おかしい」と感じている。このように、「おかしい」と感じる対象は外面に現れたものに限られないと言うことができる。よって、例(21)のようなものも含めて「おかしい」の意味を分析する必要がある。

以上の先行研究の記述とその検討をふまえ、以下で「おかしい」の意味を分析する。

4.2.　「おかしい」の意味分析

本稿では「おかしい」を多義語と考え、二つの多義的別義を認める。また、分析の最後に別義間の関連性について考察する。

4.2.1.　別義１：〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈笑いがこみあげてくる〉〈さま〉

次の三つの例を見てみよう。

(22) 新学期の始まりは、いつもぎこちなく照れくさい感覚に包まれてしまう。クラスメートとたかだか一ヶ月ちょい会わないだけなのに、髪形が変わっていたり、色が黒くなっていたり、背が伸びていたりして、誰もが少しずつ変化しているからだ。

特に女の子たちは僕ら男子より変化が顕著で、雅也はともかく冷静沈着な学級委員の春彦や、がき大将の竜太郎がドギマギとしているのが、僕はおかしくてたまらなかった。

（宇都順子『レミとアミ』文芸社　p. 87）

(23) がらんとした食堂に大きな鍋と一升ビンがおいてある。他に帆立の塩焼きらしいのと、ドンブリが並んでいるだけである。どうみても大衆食堂といった感じなのに、晩餐会などと大袈裟にいうところがおかしい。　（流氷への旅*）

(24) どういうはずみか、「発毛の真実と喜びを伝えるために･･･」というCMの謳い文句が「脱

毛の真実と喜びを伝えるために･･･」と聞こえてしまった。たぶん疲れていたんだろうが、逆説的に意味がピッタリはまってしまったのがおかしくて、眠い目をこすりながら、けっこう長いこと、ひとりでウケた。　（＝(21)）

まず例(22)は、いつもは「冷静沈着な」友人や「がき大将の」友人が平静さを失い、「ドギマギとしている」ことに「おかしい」と感じている。例(22)の「おかしい」は、友人たちの平静さを失った様子が普段の様子と異なっていることに、笑いがこみあげてくるさまを表している。続いて例(23)は、通常は「大衆食堂」での食事会を「晩餐会」とは言わないが、誇張して「晩餐会」と言っていることに「おかしい」と感じている。さらに例(24)は、あることばが表現上は矛盾しているが、その意味を考えると、意外にもぴったりと合うことに「おかしい」と感じている。よって、例(22)から(24)の「おかしい」は、ある物事が、話し手が考える通常の状態と異なっていることに、笑いがこみあげてくるさまを表していると言うことができる。

以上から、「おかしい」の別義１は〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈笑いがこみあげてくる〉〈さま〉である。

4.2.2.　別義２：〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈正常ではないと感じる〉〈さま〉

次の四つの例を見てみよう。

(25) コインを入れる。出てきた罐ジュースを一気に飲み干す。もう一本飲もうとふと下を見ると、まだコインを入れてもいないのに、取り出し口にジュースがある。おかしい…。
（囚人狂時代*）

(26) やっぱり、この少年は頭がおかしいのかもしれない。やまびこに魔法をならっているなんて、まともな人間のいうことじゃない。　（長崎源之助全集*）

(27) 科学の対象にならない真理はたくさんあるのに、科学的でないから真理ではないなどというような誤った考えが時折言われるのはおかしい。科学的思考は人間の思考の一部の方法に過ぎないのである。
（井口潔『ヒトにとって教育とはなにか？』文芸社　p. 121）

(28) 平均寿命が延びて、このところ、痴ほうが大きな問題になっている。昔は、痴ほうになる前に、多くの人があの世に行ってしまったから、痴ほうになる人は少なかった。
　しかし、平成十六年発表のデータで、日本人の平均寿命は、男性が七八・三六歳、女性は八五・三三歳になった。すべての人が、「あなたも痴ほうになる可能性がありますよ」と告げられてもおかしくない。喜んで良いのか、悲しむべきなのか……。
（秋山紀勝『ええからかん人生』文芸社　p. 25）

まず例(25)は、自動販売機に「まだコインを入れてもいないのに、取り出し口にジュースがある」ことに「おかしい」と感じている。続いて例(26)は、「やまびこに魔法をならっている」と発言する少年に対して「頭がおかしい」と感じている。次に例(27)は、話し手の考えとは異なる「誤った考え」に対して「おかしい」と感じている。よって、例(25)から(27)は、ある物事が話し手の考える通常の状態と異なり、好ましくない状態にあることに「おかしい」と感じ

ている。

また、例(26)では少年に対して「頭がおかしい」と感じ、「まともな人間のいうことじゃない」と述べられていることから、「おかしい」はある物事が通常の状態と異なっていることに、正常ではないと感じるさまを表している。さらに例(28)のように、ある人の発言が、話し手が依拠するデータの結果と異なるものではなく、正常であると感じられる場合には「おかしくない」と表現している。

以上から、「おかしい」の別義２は〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈正常ではないと感じる〉〈さま〉である。

4.3.　別義間の関連性について

「おかしい」の二つの多義的別義の関連性について考察する。

別義１（＝〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈笑いがこみあげてくる〉〈さま〉）と別義２（＝〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈正常ではないと感じる〉〈さま〉）は、〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉よって生じる感情という共通点が存在する一方で、異なる点も存在する。よって、別義１と２は意味が類似の関係にあると言うことができ、別義２は別義１からメタファーによって成り立っていると考えられる。

５.「おもしろい」と「おかしい」の類似点と相違点について

「おもしろい」と「おかしい」の分析を基に、両語の類似点と相違点について考察する。「おもしろい」と「おかしい」の類似点と相違点については、先行研究で十分に議論されているため、先行研究の記述を検討し、両語の意味の違いを確認する。

まず、両語の類似点についてであるが、森田（1977: 123）が指摘しているように、「愉快な笑いを起こさせるような、一味ちがう特徴を対象が持っている」と感じる場合に両語の意味は類似している。

一方「おもしろい」と「おかしい」の相違点について、森田（1977: 142）は、「おかしい」は事物の一時的で表面的な状況から受ける感情であるのに対し、「おもしろい」は事物の内容が人に興味を与える状態で、情的よりも知的な作用であり、プラス評価の語であると指摘している。同様に、飛田・浅田（1991: 99）も、「おもしろい」には興味深さが暗示されており、知的な興味が感じられる表現になっているが、「おかしい」はただ滑稽で笑いをさそう様子を暗示し、興味深いというニュアンスはないことが多いという違いがあると指摘している[9]。

上に示したように、森田と飛田・浅田は両語の意味の相違点について、「おもしろい」は「知的な興味が感じられる表現」で「プラス評価の語」であるのに対し、「おかしい」は「事物の一時的で表面的な状況から受ける感情」で「ただ滑稽で笑いをさそう様子を暗示し、興味深いというニュアンスはないことが多い」と述べている。

森田は、「おかしい」は「事物の一時的で表面的な状況から受ける感情」であると考えているが、4.1.で指摘したように、事物の内容に対して「おかしい」と感じている例が見られることから、「おかしい」を「事物の一時的で表面的な状況から受ける感情」と言うことはできない。しかし、その他の森田と飛田・浅田の指摘は妥当であるということが次の例(29)によって確認できる。

(29) 「そうなんですか！　これはおもしろい（??おかしい）。杜甫が土のなかの家で生まれたとは、知らなかったなあ」　（＝(12)）

例(29)の「おもしろい」は、〈新しい発見に〉〈気持ちが引きつけられる〉〈さま〉（別義１）を表し、ある対象への知的な興味深さが示されていると考えられる。この「おもしろい」を「おかしい」に置き換えると不自然な表現となる。「おかしい」は〈笑いがこみあげてくる〉〈さま〉を表すのであり、ある対象への興味深さを表さないため、「おもしろい」を「おかしい」に置き換えることができないと考えられる。

以上から、「おもしろい」はある物事に対する知的な興味を表し、プラス評価の語であるのに対して、「おかしい」は興味深いという意味を表さないという違いがあると言うことができる。

６．まとめ

本稿では、喜びの感情を表す「おもしろい」と「おかしい」の意味を分析した。分析結果は以下の通りである。

「おもしろい」　別義１：〈新しい発見に〉〈気持ちが引きつけられる〉〈さま〉
別義２：〈展開が予測できない事柄に〉〈夢中になる〉〈さま〉
別義３：〈思い通りの結果が得られ〉〈気持ちが満たされる〉〈さま〉

「おかしい」　別義１：〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈笑いがこみあげてくる〉〈さま〉
別義２：〈ある物事が通常の状態と異なっていることに〉〈正常ではないと感じる〉〈さま〉

次に、先行研究の検討を基に、「おもしろい」と「おかしい」の相違点を述べると、「おもしろい」はある物事に対する知的な興味を表し、プラス評価の語であるのに対して、「おかしい」は興味深いという意味を表さないという違いがあると言うことができる。

注

1 西村（2008：82）はメトニミー（換喩）を「ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象」と定義している。

2 矢印は因果関係または手段-目的の関係を表す。

3 目的が手段によって実際に達成された場合には、因果関係の一種である。

4 現代語の意味が詳述されている『学研国語大辞典（第二版）』と『大辞林（第三版）』の記述も、飛田・浅田と大きく異ならない。『学研国語大辞典（第二版）』（1988：260）は「おもしろい」の意味を次のように記述している。

おもしろい〔面白い〕

① ふつうとちがっていて笑い出したくなるようすである。こっけいである。

「この映画は―・い」

② 楽しくて、つい夢中になってしまうようすである。

「パーティーは―・かった」

③ 変化があって、たいくつしない。興味をそそられる。

「鴎外の小説では史伝が―・い」

④ 思うとおりで好ましい。

「この二三日、母の容体の―・くないことは知っていたので、靴を脱ぎ乍ら、僕は気になった」

5 以下では、例文中、直接の分析対象となっている箇所は下線で示し、それ以外の問題となる箇所は二重下線で示す。

6 例文の後に出典と「＊」が付してあるものは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』からの引用であることを示す。

7 好奇心を抱くことに関するフレームとは、次のように考えられる。まず、われわれは、ある対象を発見し、それに気持ちが引きつけられる。次に、その対象がどのように展開していくのかに興味がそそられ、夢中になる。さらに、その展開が自身の予測と同じであり、思い通りの結果が得られたことで気持ちが満たされる。

8 『学研国語大辞典（第二版）』と『大辞林（第三版）』の記述も飛田・浅田と大きく異ならない。『学研国語大辞典（第二版）』（1988：223）は「おかしい」の意味を次のように記述している。

おかしい〔可笑しい〕

① 〔矛盾があったりして〕笑いたくなる気持ちである。こっけいである。

② 普通とちがっている。かわっている。変である。

③ 〔態度・行動などが〕いぶかしい。あやしい。

④ 〔俗〕ばかばかしい。

9 『ちがいがわかる類語使い分け辞典』（2008：100）でも、同様の指摘がされている。

引用文献

Fillmore, Charles J. (1982) “Frame Semantics,” In The Linguistic Society of Korea (ed.), *Linguistics in the Morning Calm,* Hanshin, pp.111-137.

金田一春彦・池田弥三郎（編）（1988）『学研国語大辞典（第二版）』，学習研究社.

西村義樹（2008）「換喩の認知言語学」，森雄一・西村義樹・山田進・米山三明（編）『ことばのダイナミズム』，くろしお出版，pp. 71-88.

飛田良文・浅田秀子（1991）『現代形容詞用法辞典』，東京堂出版.

松井栄一（編）（2008）『ちがいがわかる類語使い分け辞典』，小学館.

松村明（編）（2006）『大辞林（第三版）』，三省堂.

籾山洋介（2010）『認知言語学入門』，研究社.

森田良行（1977）『基礎日本語１』，角川書店.

（朝日大学留学生別科講師）